第1章　湯けむりと二天一流、あるいは浴衣の破壊力

「んーっ！　んーーーっ！　空気が美味い！　最高！」

山あいの温泉街に、場違いなほど元気な声が響き渡る。
朱色と紺色の着物を軽やかに翻し、腰に巾着袋を提げた武蔵ちゃんは、子供のようにはしゃぎながら石畳の坂道を駆け上がっていった。

「ほらほら、遅いぞ！　置いてくからな！」

振り返った彼女の満面の笑み。夕日がその白磁のような肌を朱く染め、銀色の髪がサラサラと揺れる。
旅館『極楽亭』の門をくぐり、通された部屋の広さに武蔵ちゃんは目を見開いた。

「おおー……！　広い！　すっごい広いぞ！　しかも部屋に露天風呂までついてる！　タダでこんな贅沢ができるなんて、わたしは本当に運がいいな！」

豪快に畳の上で大の字になる。その衝撃で、着物の襟元が乱れ、豊満すぎる胸元の谷間が覗く。彼女は特に気にする素振りもなく、すぐにお茶請けの饅頭を確保した。

「悪かったな、急に連れ回して。でもまあ、たまにはこういうのも良いだろ？　戦い続きじゃ気が滅入るし。美味いもん食って、湯に浸かって、寝る。最高じゃないか」

隣に座ると、彼女の頬が少しだけ赤いことに気づく。普段は豪快そのものの彼女だが、二人きりの状況にはやはり慣れていないようだ。

「よ、よし！　まずは一っ風呂だな！　夕飯まで時間あるし、浴衣に着替えて温泉街をぶらつこう！」

武蔵ちゃんは箪笥から浴衣を取り出し、自分の分を広げて首を傾げた。「……これ、入るかな」

彼女の抱える切実な悩みだ。

俺に背を向け、着物や晒を外し、浴衣を羽織ろうとするが、胸元の布地がパツンと限界を迎えている。

「おい、ちょっと帯を締めるのを手伝ってくれ。後ろで結ぶのは、どうも苦手でな」

俺は彼女の背後に回り、帯を受け取る。湯上がり前の熱を持った肌が目の前にある。慎重に帯を締め上げると、柔らかな胸の膨らみがさらに強調された。

「ひゃっ！？」

不意に手が触れた瞬間、彼女が可愛らしい悲鳴を上げた。

「……わ、分かってる。わざとじゃないのは。だが、心臓に悪いから、あんまり変なところ触るなよ」

上ずった声でそう注意するが、顔は真っ赤だ。
帯が締まり、藍色の浴衣を纏った彼女は、普段の剣士の装いとは違う、しっとりとした色気がある。胸元はやはり隠しきれていないが、それがまた艶やかさを増していた。

「……どうだ？　似合うか？」

はにかんだように笑う彼女は、とても可愛らしい。素直に「似合う」と伝えると、彼女は嬉しそうに頷いた。

「へへっ、なら良し！　さあ、行くぞ！」

武蔵ちゃんは俺の腕を掴み、そのまま組んできた。
柔らかな感触が二の腕に押し当てられる。
一瞬、彼女が俺の顔を下から覗き込んでくる。

「……手、離さないからな」

そうボソリと呟いた後、すぐにいつもの調子に戻って俺を引っ張り出した。
湯に入る前から、俺はもうのぼせてしまいそうだった。

ーーーーーーー

第２章　月下の秘湯と果実、あるいは豊穣なる双丘の誘惑

温泉街での散策を終え、ほろ酔い気分で宿に戻った頃には、あたりはすっかり夜の帳に包まれていた。
俺たちはすぐに浴衣を脱ぎ捨て、部屋付き露天風呂へと向かう。

「はぁ……極楽、極楽……」

湯に肩まで浸かり、武蔵ちゃんは心底気持ちよさそうに目を閉じている。
湯の中で、その圧倒的な豊満さが浮力を持ってゆらめき、湯面を波打たせている。

「なぁ」

彼女がそっとこちらへ身体を寄せてきた。
湯の中で太腿と太腿が触れ合い、熱がじんわりと伝わる。
彼女は濡れた手で髪をかき上げ、自慢げに胸を張る。

「これ、やっぱり目立つよな。剣を振るには邪魔な時もあるけど……わたしは結構、気に入ってるんだ、この身体」

そう言って、彼女は俺の腕にその豊かな胸を押し当ててきた。むにゅり、と柔らかすぎる感触が腕を包み込む。

「だって、これ、好きだろ？」

図星を突かれ、言葉に詰まる。彼女は「あはは、顔に出てるぞ！」と笑うが、その耳はやは

り赤い。
俺は彼女の背中に手を回し、そのまま抱き寄せる。
「っ……！」
彼女の身体がビクリと跳ね、喉の奥から甘い吐息が漏れた。潤んだ瞳が俺を見つめる。
「……んぅ……」
手のひら全体で、その重みと柔らかさを確かめるように包み込む。
熱い。お湯の熱さ以上に、彼女自身の体温が熱い。
「……ずるいな。そんな風に触られたら、わたし……」
言葉は続かなかった。彼女は俺の首に腕を回し、すがりつくように身を寄せてくる。
濡れた肌と肌が密着する。二つの熱い心臓の鼓動が、重なり合うようにドクン、ドクンと

響く。

吸い寄せられるように、顔が近づく。月明かりの下、彼女の唇が濡れて艶めいている。

「……んっ」

唇が重なる。

すぐに濃厚なキスへと変わった。彼女が求めてくるように口を開き、俺の舌を迎え入れる。

ちゅ、くちゅ、と水音とリップ音が響く。

「はぁ……っ、んんっ……！」

息継ぎの合間に漏れる、彼女の艶っぽい喘ぎ声。

強気な剣士の仮面が剥がれ落ち、ただ快楽と情熱に翻弄される一人の女性の顔になる。

彼女の手が俺の背中を強く掴み、爪を立てる。もっと、もっと深く。

唇を離すと、武蔵ちゃんは肩で息をしながら、とろんとした瞳で俺を見上げている。
その顔は真っ赤に上気し、目元は涙で潤んでいた。

「……はぁ、はぁ。……やばい、な。これ」

彼女は熱っぽい声で呟き、俺の胸に顔を埋めた。

「お湯のせいだけじゃないぞ。……こんなに熱いの」

胸元で呟かれる言葉が、理性の最後の留め金を外しにかかる。

「――部屋に戻ろうか」

俺がそう囁くと、彼女はコクりと小さく頷いた。
湯船から上がり、身体を拭く時間も惜しんで、俺たちは濡れたままの足跡を畳へと残していった。

夜は、まだ始まったばかりだ。

――――――

第３章　熱情の秘太刀、あるいは未熟な剣士の濡れた吐息

湯から上がったものの、俺たちの熱は冷めるどころか、増す一方だった。
水滴を滴らせたまま、俺たちは布団が敷かれたばかりの部屋へと戻る。

「……ふぅっ、はぁ。ま、まさか、湯船の中で、あんなことになるとはな」

武蔵ちゃんはまだ動揺が隠せず、銀色の髪から滴る水もそのままに、畳の上で立ち尽くしていた。
「いや、違うぞ！　べつにわたしが、そ、その……求めた訳じゃない！　頭がぼーっとしていただけだ！」

強がりを言っているが、その目は俺から逸らせないでいる。
俺が近づき、彼女の腰に手を回すと、武蔵ちゃんは抵抗もせず、むしろ強く抱きついてきた。

「んっ……！」

熱くなった身体が触れ合い、唇が激しく重なる。
俺は彼女を抱きしめ、そのまま優しく、真新しい布団へと押し倒した。

「はぁ……はっ、待て、待ってくれ！　まだ、その……心が、整理できてない！」

彼女は慌てたように言うが、その声は熱に侵されて震えている。
「き、キスまではいい。その、許容範囲だ。……だが、その先は、わたしは剣の道一筋で、そういうのは……！」

「――大丈夫」

俺は言葉を遮り、彼女の頬、首筋へと情熱的なキスを重ねていく。
その胸へと到達する前に、彼女は意を決したように息を吸い込んだ。

「……わかった。勝負だ」

まるで二天一流の極意を披露するかのような真剣な表情。

「わたしは、この身を以て、剣士として、未だ知らぬ『快楽』という剣技を究めてみよう。……望むなら、それに応じるのが、わたしの流儀だ！」

そう言って、武蔵ちゃんは自ら俺を突き放し、立ち膝になった。
そして、その誇り高き美貌を、俺の熱源に近づけてくる。

「ふむ……これが、その……。なるほど、面白い形をしているな。わたしが握る刀とは、まるで違う」

彼女は真面目に考え込んでいるが、俺の熱を帯びた部位が、顔のすぐ近くにあることの異常さに、頬を朱く染めている。

「……こ、これは、どうするんだ？　口に含むのか？　……あぁ、そうか。酒と同じで、味わうものなのか？」

理屈と快楽が戦っている。

俺は優しく、彼女の柔らかな後頭部に手を添えた。「大丈夫。好きなようにしていい」

「……うむ。ならば、試してみよう。わたしが、これを――」

覚悟を決めたように、彼女は自慢の桜色の唇を開いた。

「んっ……！」

温かく、柔らかい口内が、熱を帯びた俺の剣を優しく包み込む。
思わず、短い喘ぎ声が漏れた。武蔵ちゃんの大きな瞳が、驚きに見開かれる。

「……んぐっ、ふ、ふぅ……っ」

彼女はすぐにコツを悟ったようだ。動きが滑らかになり、リズムを帯び始める。
舌が、熱を帯びた先端を優しく撫で上げ、喉奥へと誘う。

「はぁ……っ、んむ、チュッ、んんっ……！」

彼女の喉から響く、嬌声にも似た苦しさに満ちた吐息。
銀色の髪が、激しい動きに合わせて乱れる。

「……くっ、わたし、こんな、こんなに気持ちいいなんて……ずるい、ずるすぎるぞ！」

一度口を離すと、銀の糸が細く長く引いた。彼女の頬は、湯上がり以上に朱く染まり、瞳

は潤んでいる。

「むぐっ、ん、あぁっ……！」

腰が跳ね上がる。もう、限界が近い。

俺は彼女の柔らかな髪を掴み、その動きを止めた。

「む、武蔵ちゃん……もう、だめだ。出る」

「え……っ、ふぅ、ふぅ……待て、わたしが、まだ……」

彼女は悔しそうに顔を上げ、濡れた唇を拭った。すぐに別の快楽を求め始める。

「なら、今度はわたしが自慢の『双丘』で受けて立とう」

そう言って、彼女は俺の身体を押し倒し、馬乗りになった。

両手で、自慢の豊満な果実を寄せ集め、俺の熱を持った剣の上に乗せる。

「んっ！　あぁ……っ、ここだ！　どうだ、この柔らかさは！　これぞ二天一流、剛柔一体の太刀筋だぞ！」

彼女は、胸を激しく揺らし、その肉壁で俺の剣を挟み込む。
むっちりとした弾力が、俺の快感を高めていく。

「はぁ、はぁ……っ、くっ！　わたしも、擦れて、気持ちいい……！　こんなに使われるなんて、この身体も本望だろう！」

武蔵ちゃんの呼吸は完全に乱れ、荒い喘ぎ声が部屋中に響き渡る。
視界いっぱいに広がる、揺れる果実と、彼女の恍惚とした表情。
そして、ついに。俺の熱い波が押し寄せた。

「あああぁぁぁっ！」

「んんっ……！　うっ、……んくっ……！」

溢れ出る白濁した熱を、彼女は逃さず唇で受け止め、喉を鳴らして飲み込んだ。
ゴクリ、という小さな音が響く。

「……ぷはぁ……っ」

武蔵ちゃんは、口元を手で覆いながら、とろんとした瞳で俺を見つめた。
その顔は、極上の美酒を味わった後のような、陶酔の色を帯びていた。

「……うむ。悪くない。……濃いな、命は」

そう呟き、彼女は残りの滴も、愛おしむように舐め取った。

「……全て受け入れるのが、宮本武蔵の流儀だ。逃げも隠れもしない。……これも、快楽の極意、一つの到達点だな」

彼女は力を失ったように、俺の身体の上に倒れ込んできた。
濡れた肌と、熱い吐息が、耳元をくすぐる。

「……疲れたな。だが、すごく満たされている。……道も、深いな」

そう言って、武蔵ちゃんは満足そうに微笑んだ。

ーーーーーーー

第4章　聖母の甘い罠と挟撃、あるいは鞘への誘い

「……よしよし。いい子だ」

事後の余韻が漂う部屋で、武蔵ちゃんは胡座をかき、その豊かな太腿の上に俺の頭を乗せていた。
彼女は得意げな表情で、俺の髪を優しく撫でている。

「まったく、あんなに勢いよく放出しおって。……まるで赤子だな」

彼女はくすりと笑うと、浴衣の胸元をさらに大きく寛げた。
露わになったのは、情事の熱を帯び、ほんのりと桜色に染まった圧倒的な双丘。

「ほら、甘えたいんだろ？　特別に許してやる。……わたしの胸で、好きなだけ」

彼女は俺の顔を、その深い谷間へと埋めさせた。
俺は誘われるままに、その柔らかな果実の一つに吸い付いた。

「んっ……！」

武蔵ちゃんの背筋がビクリと震え、俺の頭を抱きしめる腕に力がこもった。

「あ……っ、ん、んぅ……。くすぐったい、ような……変な感じだ……」

彼女の口から、甘い吐息が漏れる。

優しい手が、俺の頬を撫でる。

「……わたしに、母の素質があるかは知らんが……こうされていると、なんだか……お腹の奥が、うずくんだ」

ちゅぷ、ちゅぷ、と卑猥な水音が響くたび、彼女の呼吸は荒くなっていく。

最初は余裕のあった「聖母」の顔が、次第に「女」の顔へと崩れていく。

「はぁ……っ、吸うのが上手すぎるぞ……。そんなに強くされたら、また……」

その時だった。彼女の太腿に触れていた俺の熱源が、再び脈打ち、鎌首をもたげ始めたの

は。

「……なっ！？」

武蔵ちゃんは目を見開き、膝の上の感触に驚きの声を上げた。

「うそだろ？　あれだけ出したのに、もう復活したのか！？　……あはは！　呆れたやつだな！　いや、それだけわたしに興奮しているという証拠か！」

彼女は嬉しそうに、そして獰猛に笑った。

「いいぞ。その心意気、気に入った！　ならば、もう一度……この『最強の鞘』で迎え撃ってやろう！」

彼女は俺の上半身を起こすと、背後から覆いかぶさるように抱きついてきた。

そして、二つの巨大な果実で、俺の怒張した剣を左右から挟み込む。

「ほら、どうだ！　さっきよりも、もっと激しくしてやる！」

ぬちゃ、という粘着質な音と共に、彼女の胸が俺の剣を呑み込む。
俺の剣は、彼女の谷間に出入りし、そのたびに胸の肉が波打つ様が見える。

「んっ、あぁっ！　固い、すごい熱だ……！　わたしの胸が、溶かされそうだ！」

彼女は俺の耳元で荒い息を吐きながら、腰を前後に揺すり始めた。
「はぁ、はぁっ、気持ちいいか？　わたしの胸、気持ちいいか！？　言ってみろ！」

「最高だ、武蔵ちゃん……！」

「っ！　……バカ、素直すぎるぞ……！　んんっ、あぁっ！」

褒め言葉に弱い彼女は、さらに興奮を高め、動きを激しくする。
「だめ、わたしも、これ……っ、胸が、ジンジンする……！　熱が、直に伝わって……！」

快楽の限界が近づいていた。俺の腰が勝手に跳ね上がる。

「っ、くる！　出していいぞ！」

「おうっ！　出していいぞ！　わたしの、この胸にぶちまけろぉッ！！」

彼女が両腕に力を込め、胸を強く押し付け、俺の剣を完全に密着させた瞬間――。

「うぐっ、おおぉぉぉっ！！」

二度目の解放。

大量の白濁が、彼女の美しい谷間へと勢いよく放たれた。

「はぁ……はぁ……っ、んっ……」

彼女は胸元に広がる白い飛沫を見下ろし、荒い息をついた。
その顔は汗ばみ、紅潮し、目はとろりと蕩けている。

「……すごいな。また、こんなに……」

彼女は指で胸元の白濁を掬い、ペロリと舐めた。
そして、妖艶な笑みを浮かべて俺を見つめる。

「でも、まだ、足りないだろ？」

「焦らしは、もうおしまいだ」

彼女はゆっくりと俺の身体から離れ、仰向けに寝転んだ。
そして、白い太腿をゆっくりと開き、その秘められた花園を露わにする。
そこはもう、期待と興奮でぐっしょりと濡れそぼっていた。

「来い。……わたしの、一番深いところへ。……全てを、刻み込んでくれ」

その言葉は、最強の剣豪からの、最上級の降伏宣言だった。

ーーーーーーー

第5章　二天一流の極致、あるいは愛という名の真剣勝負

「……んっ……ふぅ……。準備、は……いいか？」

武蔵ちゃんは仰向けになり、その白い太腿を大きく広げたまま、潤んだ瞳で俺を見上げている。

秘所はもう、これ以上ないほどに濡れそぼり、蜜が太腿を伝ってシーツに染みを作っていた。

彼女の手が、俺の首を引き寄せる。

「もう、待ちきれない。……来てくれ」

俺は自身の熱を、彼女の秘められた入り口へとあてがった。
ゆっくりと、腰を沈めていく。

「……んぐっ……！　っ、はぁ……！」

先端が侵入した瞬間、武蔵ちゃんの身体が弓なりに反った。
きつい。彼女の肉壁が、異物の侵入に驚きながらも、喜んで受け入れようと吸い付いてくる。

「……おっきい……。んっ、あぁっ……入って、くる……！」

根元まで収まった瞬間、二人の吐息が重なった。繋がった。
その事実に、脳が痺れるほどの充足感が押し寄せる。

「はぁ、はぁ……。すごい、な。わたしの中にいる……。お腹の底が、熱くて……満たされていく……」

武蔵ちゃんは恍惚とした表情で、俺の頬に手を添えた。
俺は彼女の唇を塞ぎ、深いキスを贈る。舌を絡め合いながら、ゆっくりと腰を動かし始めた。

「んんっ……！　んぅ、ちゅ……ぷはっ……！」

動き始めると、彼女の締め付けがさらに強くなる。
内側からうねるように、俺を逃がさないとばかりに絡みついてくる。
俺もその愛に応えるように、ピッチを上げていく。

「あっ、あぁっ！　すごい、そこっ！　んんっ！」

打ち付けるたびに、彼女の豊かな胸が波のように揺れ、肌と肌がぶつかる音が部屋に響く。

「もっと……！　もっとキスしてくれ！　顔、見せてくれ！」

彼女がねだるように首を伸ばす。
俺は覆いかぶさり、唇を貪りながら、激しく腰を振る。

「んちゅっ、ぁっ！　好き、これ、大好きだ……！　繋がってるの、最高に気持ちいい……！」

武蔵ちゃんは俺の腰に脚を絡め、さらに深く招き入れる。
快感を脳髄に直接流し込んでくる。もう、余裕なんてない。

「あぁっ、あぁっ！　深い、深いよぉっ！　んんっ、頭、おかしくなりそうだ……！」

彼女の瞳の焦点が合わなくなってくる。
「武蔵ちゃん……っ、気持ちいいよ、武蔵ちゃん……！」

「わたしもっ！　わたしもだ！　こんなに、愛されて……幸せすぎて、溶けちゃうぞ……っ！」

絶頂の予感が、二人に同時に訪れる。

「っ、くる！　また、くるぞ！　大きい波が！」

彼女が叫び、俺の背中を強く抱きしめた。

「俺も……！　出すぞ、中に出す！」

「うんっ！　いいよ、全部！　全部、わたしにくれぇぇぇっ！」

彼女の言葉が引き金になった。

俺は最深部に自身の証を突き刺し、ありったけの想いを解き放った。

「うおおぉぉぉっ！！」

「あぁぁぁんっ！！　んっ、んぐぅぅぅっ！！」

ドクンッ、ドクンッ！
脈打つたびに、熱い奔流が彼女の子宮へと注ぎ込まれる。
武蔵ちゃんは身体をビクンビクンと跳ねさせ、その全てを受け止めてくれた。
長い、長い絶頂の時間。世界が白く染まり、ただ互いの存在だけが鮮明に感じられた。

ーーーーーーー

エピローグ　夜明け前の再会、そして永遠の契り

「……んん……ふ、ふふ」

深い吐息と共に、武蔵ちゃんが小さく笑った。
最深部で受け止めたまま、身体を硬直させていた彼女の緊張がゆっくりと解けていく。俺

はまだ、彼女の中から抜け出せずにいる。

繋がったままの熱い場所から、まだドクンドクンと脈動が伝わってくる。

これこそが、最強の剣士が求めていた「悟り」にも似た境地かもしれない。

「……気持ちよかった。すごい、気持ちよかったぞ」

武蔵ちゃんは、力が抜けたままの腕で、俺の背中をポンポンと叩いた。

その声は、微かに掠れていて、情熱の余韻を物語っている。

「わたしの全てが、満たされている。……この満たされた感覚は、今までどんな剣の勝利でも、得られなかったものだ」

俺が彼女の汗ばんだ頬にキスをすると、彼女はとろけるように目を細めた。

俺の存在が彼女の中にいるという事実が、彼女を極上の安心感で包んでいるのが伝わってくる。

「……ん、ちゅ……っ」

再び唇を重ねる。愛おしさを確かめ合うように、優しく、長く、そして深く。
繋がった場所からは、ちゅぽ、ちゅぽ、という粘膜の密着音が響き続ける。

「はぁ……。ずっと、こうしていたいな。このまま……熱を感じていたい」

彼女の指が、俺の首筋を優しく撫で、そのまま髪を梳く。

「……まだ、硬いぞ。ふふ。さすが、わたしが認めた男だ」

彼女の言葉に反応するように、俺の剣が彼女の内側で微かに動く。
すると、武蔵ちゃんの吐息が一気に甘くなった。

「っ、んんっ！　あぁ……だめだ、まだ、中にいるのに……また、欲しくなっちゃう」

その言葉と共に、彼女の膣壁が優しく、しかし確かな力で、俺のものを締め付けてきた。
先ほどまで収縮していた内側が、再び獲物を求めるようにうねり始める。

「う……っ、武蔵ちゃん、そんなことしたら……また、始まっちゃう」

「……いいだろ？　まだ、夜は長い。それに、わたしは最高の鞘になってやりたいんだ」

彼女は挑発するように、微かに腰を動かした。
俺は再び、身体の奥底から熱が湧き上がってくるのを感じた。

「んんっ、くぅ……！　あぁ、武蔵ちゃん……！」

「はぁ……！　あぁっ、そこ……！　中で、また、熱が生まれていくのが分かる……！」

俺は彼女の瞳を見つめたまま、ゆっくりと腰を揺らし始めた。

繋がったままだからこその、ねっとりとした、濃密な愛撫。
一センチ動くたびに、武蔵ちゃんの口から「んぅ」「あぁっ」という甘い吐息が零れ落ちる。

「……深く、深く、入ってくる。……わたしの全部、突き破って……」

彼女は恍惚とした表情で、俺の顔に何度もキスを繰り返した。
そのキスは、愛と、快楽と、そして勝利の祝福に満ちていた。

「んんっ、ちゅ、ちゅぅ……！　……もう、だめ……っ！　ずるいぞぉ……！」

武蔵ちゃんの叫びと共に、俺のものが再びその柔らかな内側で大きく膨らんだ。
長く深いキスをしながら、俺たちは夜明け前の静寂の中、再び愛の熱に溺れていった。
二人の剣士の戦いは、今、最高の「愛」という境地で、永遠の契りへと変わったのだった。

～完～